日本に一つ 世界も注目

川原園井堰の柴掛け（かわはらぞのいぜき しばか）

日本で唯一の「柴堰（しばぜき）」

串良町では、昔話のままに、今でも地域の人々が山で柴を切り、川に堰を作って田んぼのための水を取っている施設があります。

この川原園井堰は、串良町細山田下中地区の串良川（幅43m）に、毎年作られています。井堰で取られた水は有里用水を流れ、沿線の約270haの田んぼを潤します。米作りが終わると柴は半分取り外されますが、防火用水等としても一年中利用されています。

日本の歴史を物語る堰

川原園井堰は約380年前の江戸時代初期に薩摩藩の新田開発により現在の場所に作られました。初めは木杭基礎で、明治35年に石基礎となりましたが、大きな台風のたびに流失していたため、昭和25年に現在のコンクリート基礎となりました。

毎年3月、串良町土地改良区が中心となって、ドングリがなるマテバシイの木を切り、それを竹で結び、「柴束」を作ります。

そして、3月中旬頃に、15人～20人で「柴束」をコンクリート基礎部分に並べ、最後に「コモ」と呼ばれる稲の藁（わら）で織られた粗い目の布で敷き込み、「柴堰」は完成します。

こうして、コンクリートの基礎と自然素材が融合した川原園井堰は、60年以上、地域に安定して用水を供給してきました。

串良町土地改良区 理事長
出水園（いずみぞの） 利明（としあき）さん（78歳）

柴掛けに携わってきて40年以上になります。これまで施設の維持管理や補修を行いながら、毎年、柴の掛け替えを続けてきました。歴史的にも全国的にも珍しい堰として注目を浴びていますが、近年は土台部分であるコンクリート等の老朽化や、マテバシイの取得地の減少、作業者の高齢化が課題となっています。

人と自然と技術が作る「場」

柴掛けは景観としても貴重なものです。平成12年～15年に文化庁が実施した調査研究報告では「重要地域」に選定されました。また、平成27年10月、文化遺産の保護に関わる国際組織イコモスが福岡で開催した学術シンポジウムでは、日本からの唯一の発表題材となり、希少性や人々の交流の「場」としての機能が、世界の研究者から高い評価を受けました。

現在は発表者を中心に、映画製作が進行中です。地域の貴重な資源「川原園井堰」にこれからも注目です。

問 串良総合支所産業建設課
☎0994-63-3114

▲柴掛けしてから1週間後の様子